
VIGOR

神白夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VIGOR

【Nコード】

N9391V

【作者名】

神白夕

【あらすじ】

今から約五十年前。世界を揺るがした大戦で、人類の切り札と言われた武器があった。伝説の鍛冶師が打ち、至高の魔法使いが魔力で強化した魔剣の名を、ギアーズ。

魔剣と世界を巡る、戦士の物語。

第一話 (1) (前書き)

ファンタジー好きな人、評価よろしくです。

第一話 (1)

プロローグ

とある雪降る街。深夜、寂れた住宅地の一角。

月の光が辛うじて差し込む公園のベンチに、少女が横たわっていた。黒髪、黒眼のかなりの美少女のだが、明らかに様子がおかしい。体は細かく震え、顔色は悪く、衰弱していることが見てとれた。

そんな少女に近づくと人影が一つ。

剃り残しの髭がまばらに生える、中年の男。

下卑た笑いを浮かべ、少女を見る。

男が少女の体に手を伸ばした時。

「何してる」

少し幼さの残る低い声が男に投げつけられた。

男が慌てて振り向くと、コートを着た少年が立っていた。

黒髪黒眼。

その黒眼が鋭く男を射抜いていた。

「ま、まだ何もしちゃいなえ……」

「消えろ」

あたふたと弁解する男を無情に遮る。

そのあまりの迫力に男は後ずさりを始めた。

「消える、カスがっ」

少年の怒号に背中を向けて逃げ出した。

細かく震える少女を抱きかかえ…お姫様だっこをして、少年は一人暮らしの家へと駆け出した。

第一話 (2) (前書き)

感想ください、お願いします！

第一話 (2)

清潔なベットの上ではあの黒髪の少女が寝息を立てている。

寝室の隣、キッチンには少年と鍋。

鍋を火にかけている少年は、コキリと首を鳴らした。
火を弱め、テーブルへ向かう。

読みかけの本を取り、栞をはずそうとして…止まった。

本を置きなおして寝室の扉を見やる。

程なくして扉が開いた。

「おはようございます…」

多少緊張した様子で出てきたのは昨日の少女だった。

「おー。おはようさん」

少年の軽い返しに緊張がほぐれる。

少女は促されるがままテーブルにつき、あたりを見回している。
すると。

ふたが開けられた鍋からいい香りがまき散らされる。

ぐくうううう…

鳴り響いた空腹のサインに少年はニヤツと笑い、少女は顔を赤らめる。

少年は鍋のスープと、焼いてあったパンをそれぞれ皿に盛る。

少女の目の前にスプーンと共に置かれた瞬間。

「いただきますっ」

少女の、戦闘開始の合図が響きわたった。

第二話（前書き）

この世界の説明をちよいちよい入れていきます。

第二話

「ぷはー、おいしかった」

瞬く間にパンとスープを食べ終え、

少女は満足そうな顔で

「幸せ……」

と呟く。

「そりゃあ、よかった」

ラフな格好をした少年は少女の様子にニヤリとしながら正面の席に着く。

「あ！ごちそうさまでした！」

深く頭を下げる少女。

「お粗末さま」

穏やかに返す少年に少女が問う。

「名前、聞いてもいいですか？」

「アラン。アラン・ギリシア。あんたは？」

「ミリシア・ブランドンと言います。…あ、そういえば」
突然不安そうな顔をするミリシアにアランが首を傾げる。

「私、なんでここにいますか？」

ミリシアの質問にアランが溜息をつく。

いまさら過ぎる質問に拍子抜けしたらしい。

「昨日、公園で拾った」

ミリシアは訝しそうに目を細める。

追加説明がある、と判断したアランはボリボリと頭を掻く。

「万屋ギルドって知ってつか？」

聞きなれない単語を聞き、ミリシアが首を振る。
数あるギルドで、知る人ぞ知るギルドなのだ。ミリシアが知ってい
たらおかしい。

「簡単に言うと、だ。草抜きであろうが、ペット探しであろうが、
戦争への参加であろうが…そういう仕事を受け付ける、
何でも屋ギルドだ」

「へえ…」

感心したように頷くミリシアにアランが続ける。

「とにかく、その仕事の帰りでお前を見つけた。

お前、真冬なのに薄着でベンチに寝てたからかなり衰弱してた。
そこをおっさんに襲われそうになっていた」

「マジですかーっ？」

急にでっかい声を出したミリシアは、耳を押さえるアランに気づく。

「どっかしました？」

「鼓膜…破れる」

アランの苦悩など露知らず、ミリシアは首を傾げていた。

第三話（前書き）

この世界の説明です

第三話

鼓膜の痛みから立ち直ったアランは、
物珍しそつにあたりを見回すミリシアの前に座った。

「お前に聞きたいこと…いや、選んで欲しい事がある。

これからのお前について、だ。選択肢は三つある。いいか？」

アランはミリシアがコクコクと頷いたのを確かめ、指を一本立てる。

「一つ、お前のアテがあるならそこに行く」

二本目。

「二つ、養子にしろらう」

ミリシアが首をブンブン振るが、アランが手で押さえる。

最後、三本目。

「三つ、ここに居候」

「むう…」と唸るミリシアの前に、サイズが小さい男物の衣服とバスタオルが置かれた。

アランは上を向いたミリシアを手招きして、階段を下って行った。

「ここは…」

アランのこだわりで作られたそこそこ広い風呂場だった。

(それでさつき服とタオルを)

浴槽には既にお湯が張ってある。

「ここで風呂でも入ってゆっくり考える」

気遣いを見せたアランがミリシアに聞いた。

「お湯どうだ？」

「ちよっと温いです」

片手をお湯に突っ込んだミリシアが返答する。

「わかった」

アランが壁の赤い水晶に手を触れると、風呂の温度がすぐに上がった。

「わ、あったかい。どうやったの？」

アランが怪訝そうな顔で答える。

「魔力給湯システム。知らないのか？」

ミリシアが首を傾げる。

魔石と魔水晶という物がある。

前者は魔力が込めやすく、放出しやすい石。後者は流れた魔力を特定の属性に変えたり、強めたりできる水晶。

このシステムはその二つの特性を利用したものである。

今アランが触れた赤い水晶は火の魔水晶。壁にはもう一つ、青い氷の魔水晶もある。

使うにはどちらかの水晶に魔力を流すだけでいい。

そこから魔石製のパイプが伸び、風呂の中へお湯や水を届ける。

風呂だけでなく、大体の給湯システムはすべてこれである。

という事をアランが説明すると、ミリシアは単純に驚いていた。

そんなミリシアにアランは疑問を覚えていた。

キョロキョロとするミリシア。

あの部屋にはそんなに物も置いていない。

当たり前のシステムを知らないミリシア。

いまやド田舎でもある装置だ、知らないはずがない。

この子は何者だろうか…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9391v/>

VIGOR

2011年10月9日13時45分発行